

## 「春を待つ花」

総園長 宮下 智

彼の背中が、湿疹で真っ赤だった。真夏のできごと、彼は入浴を拒否し続けていた。入浴に誘えば「いけませ〜ん!」「あとで〜!」「ダメ〜!」居室棟内に大声が響いた。それ以上誘えば、今度は職員に手が出て、足が出た。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

彼の口は、気持ちとは裏腹だ。

ある日、街のホームエイドの店で彼に出会った時、私の「コンチワ」に「ダメ〜」と答え、「おかあさんは?」の質問に「あとで!」と返し、「ウ〜ン」と不機嫌な声を出しながら、その後、彼は、ちゃんと母親のところまで私をまっすぐに案内してくれるのだった。実は、心根のやさしいやつなのだ。

入所前、初めての養護学校の施設体験実習の時にはこんなことがあった。確か、高等部一年生。

二週間の実習期間の内、彼の参加は、確か三〜四日だったと思う。おそらく自閉症の障がい特性に起因しているのだろうが、彼は棟内に入ることができず、玄関と玄関の入り口に置いた椅子とテーブル席のそばで過ごした。丸坊主に野球帽、強迫的に上まできちんと上げられたジャージとソックス、手にはこれまた肌身離さず持っているフライングディスクの円盤一枚と手製の柄のついたマイク、そしてその頃バレーボールの日本代表選手だったかおる姫（菅山かおる選手）の写真、これにはセロテープが何重にも貼られている、そして、修学旅行?のお土産の扇子が握られていた。食堂に誘えば、大声が出た。作業室に誘えば大声が出た。

母親の希望は、卒業したら明星学園入所ということの中で、最終日、私は彼と話す時間をとった。彼を相談室に誘う。「大事な話があるんだけど、お母さんと、君と園長さんと三人でお話したいんだけど、お願いできますか?」彼の口からは、いつものように反対言葉が出たが、身体はスムーズに相談室へ。相談室では、私とお母さんとで彼を横抱きにしながら話が始まった。この実習期間の振り返りだ。

「明星学園へ実習に来てくれてありがとう。しかも頑張って三日も来てくれて。初めてのところ、本当に苦手なのに頑張ったよね」もちろん、彼の口は「ダメ〜」「いけませ〜ん」と叫び続ける。「園長さん、考えたんだけど、この三日間、明星学園に来たって、すごく意味があることだと思うんだよ。君は、お家もお母さんのことも大好きだよ。だから卒業したらお家に居たいなあって願っている。でも、お母さんは、明星学園に行くことができれば良いなあって思っていることも知っている。悩みは深いよなあ」彼の額から、背中から汗が噴き出てくる。そして口は「ダメ〜」「いけませ〜ん」だ。「そこで君は考えた。この実習期間に全く明星学園に行かないっていうのは、やっぱりダメなんだ、卒業したらどうしよう、どこに行けば良いんだ?ってお母さんを心配させるよね。でも二週間全部来ちゃったら、お母さんは、やった一、入所できるってなって、お母さんやお家が大好きだってことが伝わらないまま終わっちゃうよね」「君は、すごいよ、三日来る、この絶妙な選択、お母さんも、これならうまくいくかもって思うよね、大好きなお母さんをごっかりさせなくて済む。そして、君も明星学園の様子がわかる、けっこう良いところだよ、明星学園?どうだった?」彼の大声は、だんだん萎んでいく。身体の色も抜けて私とお母さんの膝の上でゆったり抱かれている。「また、練習において、園長さん、待っているよ」お母さんがきょとんとした表情をして訊ねる。「本当にわかってるんですか?」私は答える。「大丈夫、ちゃんとわかっています」彼は、その後、高等部三年まで実習を繰り返し、卒業と同時に入所になった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

それから、一年、電車の大好きな彼は、外出で何回も職員と電車に乗った。そんなある日、彼の怒りは爆発した。

抱えている気持ちが伝わらないときに彼は必ず「ダメ〜」「いけませ〜ん」が多くなる。それが高じれば、その言葉は、他のメンバーさんに向かう。そして、ドラえもののビデオを見ては、のび太がお母さんに叱

られている場面で、怒りだす。そして、爆発する。

私たちは、その行動を次のように理解する。「彼には、何か伝えたいことがある。あるいはお願いしたいことがある。でもそのお願いは、彼にとっては<わがまま>なお願いであるかのように感じてしまう。<わがまま>なことをいう人は、怒られる、そして嫌われる、一番大好きなお母さんに叱られる。だから、のび太が母親に叱られる場面を自己像のようにして繰り返し見てしまう」と。

大至急、相談だ。

彼は、入所以来、一つずつ自分の思いを伝え続けている。

「僕は、味の濃い食べ物は苦手です」と味噌汁を残し、ハンバーグのデミグラスソースを洗い落して食べた。食べることができない給食メニューの時には、カップ焼きそばを味付けなしで食べた。本当の素焼きそばだ。学園での実践は、家庭に伝えられた。そして、「君の思いは<わがまま>なんかじゃない。ずっと食べなくちゃいけないと思って頑張っただよ。お母さんもちゃんとわかっているよ。怒るわけがないじゃないか」と伝え続けた。

また、夜、なかなか眠れず、したがってお昼近くまで眠っている彼の行動を「僕は、頭の中がグルグルしてなかなか寝つけません。頭の中が整理されるまで、カルタを整理しながら起きていたいんです」と理解して、応援続けた。おそらく学校時代、どんなに脳みそが疲れてしまっても、また、寝つけなくても翌朝、必ず定時に起きて登校しなくてはならなかった状況は、彼に大きな負担、過剰な頑張りを強いていた可能性は大きい。

そして、彼は葛藤の中で、「お母さんと二人きりで電車に乗りたいたいこと」を私たちに教えた。

彼は、四人兄弟だ。彼が長男、そして、そう年の離れない妹が二人、そして年の離れた弟がいる。

物心ついた時には、すでに母親は二人の妹さんの育児に大忙し、彼は、おばあちゃん子として育ってきた経過があった。彼が、お母さんと電車に乗りたいたいと伝えた時、私にはピンときたものがあった。「そうか、彼には母親と二人きりのお楽しみが少なかったかもしれない」と。

仲の良い彼の家庭は、家族みんなで出かける。が、誰も悪いわけではないけれど、おばあちゃんが彼を見て、お父さんが妹さんを見て、お母さんが一番小さい妹さんを見る。当たり前な風景だろう。

が、その状況を知的障がいと自閉症のある彼が見た時、そして、母親想いの、母親が大好きな彼が見た時、どんな思いが行きかうのだろう。

重ねて言うけれど、決して誰も悪くない。

ただ、彼の立場に立ってみれば、心の中に去来するのは、「僕はお母さんに嫌われているかも?」「でも、お母さんのところに行きたいと言えば、お母さんに迷惑をかけるかも?妹たちを見れなくなるもんな」「そんなことをしたら妹たちだって悲しがる」「おばあちゃんだって、自分には面倒見ることができないって悲しがるかもしれない?」の気持ちだろう。

「お母さんと一緒に、二人きりで電車に乗ろう。その気持ち、応援するよ」こうして支援が動き出した。

お母さんはもちろん、快諾だ。「楽しみだわあ!」いつでもそうだが、息子さんの新しい変化を前向きに捉えてくれる。

そして、楽しみの母親との電車旅が終わって、学園へ。ちょうどその日は入浴日だった。ちょうど玄関で顔を合わせた私に、「お母さんと電車に乗ってきたよ、楽しかったよ、応援してくれてありがとう」、そんな気持ちなのか軽く視線を合わせると、そのまま風呂に直行したのだった。

こうして、彼は、数ヶ月ぶりに入浴した。

それから十年、彼には、力強い応援団がすでにたくさんいる。クラスの職員はもちろんのこと、お母さん、お父さん、おばあちゃん、妹さんたちとその旦那さん、赤ちゃんが生まれて彼はもう伯父さんだ。みんなが彼の一つひとつの変容をいつでも心待ちにして応援している。春を待つように。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>